# 呉鎮守府の東郷平八郎

高田　茂臣

## 1．はじめに

図１　東郷平八郎墓

典拠）東京都多磨霊園、筆者撮影。

後の元帥海軍大将・東郷平八郎は、海軍大佐時代の1890年５月13日から1891年12月14日までの１年７か月間、呉鎮守府第２代参謀長として在任した。広島県呉に鎮守府がおかれ、軍港となったのは1889年７月である。その前年には、対岸の江田島に海軍兵学校が東京・築地から移転してきていた。

1886年９月以後４年間、気管支カタルのため引入療養を続けた東郷は、同鎮守府参謀長として復帰を果たした。呉時代の東郷は、長男・彪（1885年生まれ、侯爵）に続き、テツ子夫人との間に二男・実（1890年９月10日生まれ、海軍少将）、三女・八千代（1891年10月13日生まれ、海軍中将園田実夫人）[1] を儲け、私生活の上でも順調だったと思われる。

佐世保鎮守府司令長官（1899年１月19日－1900年５月20日）、舞鶴鎮守府司令長官（1901年10月１日－1903年10月19日）時代の東郷については活動の一端を紹介した研究が存在するが（西尾、2018；飯塚、2010）、呉鎮守府時代の東郷については、トップの司令長官でなかったこともあってか注目されることが少ない。本稿は、中堅幹部時代の彼に焦点をあてるものである。

東郷大佐はこの時期、平時におけるスタッフ部門の長として上司の司令長官・中牟田倉之助中将を補佐し日常業務をこなすかたわら、やがて戦時に役立つであろう仮想敵の重要な弱点を看破することになる。

## ２．北洋艦隊の来航

1888年、北洋通商大臣・李鴻章により日本海軍を仮想敵とする清国北洋艦隊が発足すると、丁汝昌は水師提督（艦隊司令長官）に任命された。日本では大津事件（1891年５月11日）の直後にあたる1891年６月30日から８月５日にかけて、彼は６隻の艦隊を率いて日本各地を訪問した。旗艦の甲鉄砲塔艦「定遠」（7,430トン）に坐乗し、同型艦「鎮遠」（林泰曽艦長）等を伴っての来航は、最新鋭の巨大艦を率いて日本を恫喝することが目的の一つだったといわれる。

7月11日、丁提督は皇族や大臣、陸海軍将校、新聞記者等を横浜沖に停泊中の定遠に招待してレセプションを開催した。やみくもに機密を保持する方法より、むしろ開放して艦隊の威力を見せつけてやった方が、はるかに威圧的効果があると計算したのだ。定遠は鎮遠とともにドイツに発注され、ヴルカン・シュテッティン造船所で建造された、清国海軍の主力艦であった。

案の定、当時の日本では第一に数えられた防護巡洋艦「高千穂」（3,650トン）、同型艦「浪速」の倍もある大軍艦を前に、新聞記者等招待客の多くは圧倒された。丁提督が日本に来航した目的、すなわち清国海軍の示威運動は完全に達せられたのである。

他方で、内部公開はかえって定遠の艦内構造や北洋艦隊の士卒の練度の低さを日本海軍に暴露する結果となり、日清戦争時の黄海海戦において清国敗北の一因となる[(2)]。それは宮島・呉でも繰り返された。

## ３．東郷の慧眼

７月25日から28日まで艦隊は瀬戸内海の宮島沖に碇繋し、呉鎮守府首脳等を招いての艦上レセプションが終わって二日後、装甲巡洋艦「平遠」（2,100トン）は修理のためとして呉軍港に入港した。平遠が軍港内に停泊中、東郷参謀長は同艦の甲板が不潔で整理整頓されておらず、加えて自慢の26cm主砲に兵員の洗濯物が干してあるのを見た。

軍艦の魂ともいうべき砲門を、物干し竿のように扱っている。しかもかかる不作法を外国に来てやるようでは、全体の士気が推察できる。いかに上に二、三の名将がいようと、士卒の精神が緊張を欠いていては、有事の際に本来の威力を発揮することは不可能であるとして、北洋艦隊を「焼身の名刀」（付け焼刃）と評した（小笠原、1931、170－171頁）。

図２　旧東郷家住宅離れ

注）東郷が呉で１年７か月間使用した借家の離れ（母屋は現存せず）。
典拠）広島県呉市、筆者撮影。

実際のところ「軍艦は強大堅固の新艦であったが、乗務人員は人員充足も危うく、訓練も未熟な、実戦・艦船勤務能力も疑わしいものであった。その上、海軍将校は十分な訓練を受けておらず、指揮官の間は不統一であり、清朝海軍はまだ近代国家の軍隊になり得ていなかったのである」（馮、2011、40－41頁）が、多くの日本人が清国艦隊の見た目に圧倒されるなか、海軍軍人としての東郷の観察眼は注目に値しよう。

## ４．おわりに

1891年12月14日、東郷は健康回復とともに洋上勤務にも耐えられると判断され、浪速艦長に異動となった。日清戦争で定遠・鎮遠の二大甲鉄砲塔艦を基幹とする優勢な清国艦隊に対して、伊東祐亨中将率いる連合艦隊は、優速と速射砲の巡洋艦によって勝利を得た。東郷浪速艦長の日清戦争での活躍については、多くの既存文献で論じられている。

日清戦争が勃発すると、林泰曽は鎮遠艦長として従軍した。定遠は黄海海戦（1894年９月17日）に参加したが、日本側に既知の艦橋が砲撃を受けて破壊され、丁提督も負傷し指揮能力を失った。林艦長は同海戦の後、鎮遠が巡航訓練後に座礁した責任を取って自決した（1894年12月）。丁提督も日本の威海衛攻略の際に北洋艦隊が壊滅した責任を取り、降伏の際に自決する（1895年２月）。

日清戦争を機に、東郷の海軍軍人としての能力が国内外に知られるようになった。彼を世界の英雄にした日露戦争の日本海海戦は、その10年後のことである。

**注**

（１）　長女と二女は夭折した。

（２）　馮、2011、第１章、参照。

## 参考文献

飯塚一幸（2010）「コラム　舞鶴鎮守府と東郷平八郎」、坂根嘉弘編『軍港都市史研究Ⅰ　舞鶴編』清文堂出版、所収。

小笠原長生（1931）『聖将東郷平八郎伝』改造社。

呉市史編纂室編（1964）『呉市史　第３巻　明治・大正期の呉海軍』呉市役所。

相良俊輔（1974）『海原が残った‹提督東郷平八郎› 上・下』光人社。

鈴木亨編（1990）『帝国海軍提督総覧』秋田書店。

田中健一・氷室千春編（1993）『図説　東郷平八郎　目でみる明治の海軍』東郷神社・東郷会。

西尾典子（2018）「コラム　佐世保鎮守府の東郷平八郎」、北澤満編『軍港都市史研究Ⅴ　佐世保編』清文堂出版、所収。

馮青（2011）『中国海軍と近代日中関係』錦正社。

（2021年11月９日脱稿）